863
122

国立国会図書館　　タイトル『無東西』　請求記号 863-122

ガラス使用

無東西

出羽 秋田
荃梅 編

本来無東西ハ一休法師のことばの出所
なきもれくはかくとつゞれな北西もなく天乃
岩戸にかもらせたまふとやこの世を
ふたゝびはらて西よりかれのなきふうきたる
西ハ何の子細もさらすも金色無絶の光よても
はらんとなりんたま此よし秋田の荃梅東
西より来りて西に着乃懐にあひて俳の
尾にも表裁むらへ余さまり此際に一集を

863-122

国立国会図書館　タイトル『無東西』　請求記号 863-122

ガラス使用

つくり主の家法となせんとしておのまゝに名を
もとむるにちなみて無東西と號するハ四民泰
平の恩波に浴して四海兄弟の交深く親
遊士風客満ても飢寒乃百憂なからしむるハ豆
てうつ鬼もなく破石らく浮敵もなき冥加
おそろしき
御代を表して無東西とハ字なりけり
文政二年十二月二十四日　篤老

無東西の一白をとくと
翁におしたるハ兎てく〳〵
い〳〵纏のきりたりけ星
まして南北戎究め人年ハ
嶋門乃すき筋しきの尾戎
さゝりし　梧立乃枝ハ根を
出し哉　楽あらしき

笠りかの四句の文をとゝ紀
の川と日乃出る山越して
ふゆきとく帰る参梅還
故ニ冢塚陳坂十方六
ちうけ郭くる那かれ参梅 云く

文政ニ年春

岳か滝

四季混雜

折らけく人呼く飛る雪梅の那　京 蒼虬
保古鳥井は冬寒る乃十日坊　雪雄
紫陽花乃軒やかりぬ古すさも　布雪
今みえけ二秋をぬ花毎乃月　備尾道 蘭溪
けぬけさはらすや芸の大風き　芝蘭
よきも里ぬ見て走りく又ろ耳立　雪臣
夜嵐くぬ多く中通か千鳥の那　五春
下ぶみせりまゝ絶て前倉のもし　千有

けふ迄は野分もしらし親の跡　出羽 帽缸
門の前に鴨の啼く仕舞かな　可来
出はなれし市の夜もなかりしつく　仙風
我か月ては人来ぬなりけり芒の花　潦鶩
鴨大寂寥魚は水にわするるの月　秋禾
見えぬ山の色村雨は帰りなく鮭　兵庫 一草
松に蝉蔦も出きし野は萩　桐栖
こそ行く浅茅なるや夜衣　伊豆 一瓢
家起にて居り合ふ也や春の庵の子　有鱗

月夜かな雲のひるてや帰る鳥　カハチ 禾耜
木の葉も化して帰る門の蝉　月簑
朝日かりしぬる月雨の塚にし　ヒコ 仙斧
秋あさみけりて浪か小の桜かれ　大坂 禾彦
渡りて夢し寒る小雪かな　竹斎
そとまてはけりてなし錦手　公路
うつろひし思ひ居して秋の子　魚眠
菓子の見ゆる小舟の夜秋菜は　釣翁
角くくり下れ小雨よ孔川　草斎

国立国会図書館　タイトル『無東西』　請求記号 863-122
ガラス使用

ゆるさるゝ年よりの秋の風　馬光

夕立や竹の葉ならす作り笛　夏雲

むら雨や芭蕉へ入るとぬれぬ蛍　耳古

野分してうすれ行なりかの秋の色　春魚

猫の子も天目のうへよ生身魂　子平

聾さいのよし覚えけりつる星　梧風

折ふしの見え隠れさへ梅の花　士方

新暦先よき事は見えけり　藤彦

蜻蛉の好きな竹やねや井づゝ　タヒコ 万籟

絵にも稀な桜朝ぼらけや梅の春　ヒメ路 千丈

若草の深くをとめや宗盛る　桂兎

雨の中けりやとかわのすゝき哉　魚村

木の実やとものひとしきり音　佳窓

冬鳥や浜しらさ宿えけり　曽根 亀洞

うそつきの出そ晩鳥なし夜ねむ　宇崎 五芳

朝のよい雨あるぬ胡蝶あれ錦の声　高砂 赤朝

蓮藻うくや晩しきりみち数　ムツ 乙二

篝火さふつ晩鳴の夜野哉　玉之

袖風のやうに動く牡丹かな　ムサシ 鶯笠

夏闌る秋乃は先や蚊のこゑ　太節

つらゝ一ハいくらも遠し野風のたち　寥松

麻の葉の夜の名所乃さゝやかける　備三原 芝鳳

人をみて見きハ新まゝ千首哉　茶隠

渡り鳥二の足ふむや千々本立　月村

涼しさハ雲の上咲も見えぬ丸　ミハリ 塊翁

鐘つきてひとつきりものも花　梅間

朝日に粗川すみをたのむ哉　沙鴎

三

名月や木曽路もと見ぬも口おしき　倣雨

神に仕ハ日の雲色乃待より　古枚

いつ迄もかゝる朝けの月ならむ　秋平

新しきや木槿乃おちる朝の月　芦水

ゆふぐれの鐘乃せまる秋の声　李朝

深山乃て浮世をかす鹿の声　ムツ 冥々

立つや秋鬼の字をもらうてくと　芳齋

降まつや餅をも延して二日に鹿し　𠆢孝

芦火焚て縁のけまいらせしのむ　多よ女

四

さゆや霧はおけども神さくら　アキ 玄蛙

おほ年山鉢をとする十夜かな　逸史

その入らぬむしろ梅はさくてなし　女 文衣

神主の枝拾ふ茶をさかふ木槿かな　春厓

啼花むしよわも重き嵯峨の花　嘯二

松切りもおくしてゆるや秋の暮　尼 露宿

梅折るやむしの氷のあせたる哉　尼 荷香

余の人の留まてちる菓山まつ哉　ヒロ 和風

竹燃す油をしれり啼くかな　李玉

毎日の風で選まず芭蕉哉　西條 紫籬

朝霧色深るや雛鳥の啼ゆかね　玉斧

門口に霰をも飾すや慈ゆる山　小泉 保寿

住吉の松葉をしわ紙子かな　女 梅御

雲とけや松も梅に竹の音　至鉄

山ゆり外尾の見ぬ出る春は哉　千可

清くなれぬ乙めもおしむ春惜れ哉　伊賀 椿堂

咲る春は千とせの年一つ哉　推己

葉や月みせんの古しぬうち　長門 羅風

国立国会図書館　タイトル『無東西』 請求記号 863-122

ガラス使用

ひとつ咲ハさミしかるへし茄子のはな　大坂 奇劉

ちるとしも根葉乃うへや茶たる　升眉

は青のおも乃ひとつ中涼ひとつ　屋烏

大雪や月代しまる小僧達　備 尾道 陶然

不断咲桜もありてぬくし汁　尼 風絮

末枯乃すゝき折燈の事　圭充

氷たる夜なかり琵磨のまへかけん　土佐 剛藏

蓮池の匂ひそはけまりや朧月　知澤

ちらくるハ見うけそこなひ秋のくれ　雪々

雲乃峰や梅ら晴なかしく雲も　出羽 馬了

杜若女ならハ笠ハこほし利　可登利

蕭とさしかともゝ乃こゝろかれ　東皐

角力取の噂するや花なかりけり　御風

ことし紫す人の岩かわ荻之抱　永栽

さミ之葉之うちも見ていなかりけり　小野人

一尺も痩しゆや海苔あ寸垣のみ　日向 真彦

木の孫や初花付まし時鳥　フニ 葵亭

月そむし雲西に見て不朝哉　月化

明かゝる中手もはれ芭蕉
備ヲカ山 幽維

星々影やまぬ雲も引や家の隣
玉ミ亡 又助

待宵や明は乃光りを涼しく見る
笠ヲカ 古音

涼しさやすゞしさの明る朝
ヲノ道 藏六

思ひ切て出る色ハ藤本も牡丹の處
墨猪

桃木色のもゝの色りや月と雪
一色

十六夜やまハりて見てさゝ山の梟
芳水

ちやり鵜や舟からまたに比と隣
三河 阜池

蜀介ハ咲つ花しあるあかざんこう那
秋擧

葎下庵ても地鍾る出ましれ
大坂 三津人

涼しさや此寐ぬ人か馬鹿る
月泉

朝の月萬ハ遠のらうらを婦く
尼 冬色

蛙啼出ずしや麦乃川
文賀

宵にいつかの啼比とはこの事
月臣

蝉啼や本は切まる楠の香
吐雲

菜よしとさく折る出乃香
祇杖

星の夜もとり待白玉葉しの香
長崎 韓風

木陰きの来る来も持ちハ筆算
サツマ 関叟

二籟乃家帰りけんわかくきて　ムサシ　蕉雨

もとうしき長大根のつららかな　芝山

春の夜乃露ふまんうれひし心　ムツ　太呂

うき世をおのれおくせん紙子哉　旧人

寒ちと寒ぬ朝ハなけきを梅の花　耆来

夜の花むしとのミ見てけりこゝろ　十丈

鍛冶ハきえてけり露時雨　京　芙九

春莟取と見ゆらむし家衆うれ　梅價

心新やかくく御霊ミて春の花　定雅

目に暑き山や梢乃雫たまり　松前　布席

寒る乃鍋釜をすゝめすゝれつる由　アキ倉ハシ　魚目

身夜くまくもや戸をる乃風けふ　拾貝

朝海ていきましのこゝやこゝもの人　佳又

むしろに丁子匂ひやくすり喰　巨江

茶の家乃ふる揺えむれ枯野かな　雋民

山路にけんとうる道の落葉かな　也籟

鯨吹く出るや家々をと抔りして　維鵬

風に手乃ゆく里の娘かな　圭甫

人はる風巾乃糸たへ入りなむ哉　スハリ 足炭

撫見るかくせる付て月日星　木天

人の代もしみしくくるしき世葉哉　大蘇

春の二度枯株乃むしの出るまて　月底

夕顔ひすゝや晴雨乃はしり出　岳輅

朝露はむすき申なや比丘尼　備尾道 一老

眼茶ゞなを朝もほかの菜のみ　龔古

臼こゝすきまくるゝ年隣かな　亀六

渡り鳥の海世上年車でる乙鳥の車　笠齋

居風呂のぬるみて入る月夜哉　アキク 金英

つるの月をおしくてくる帰る嫁かな　啼谷

鶴鳴や拾いてものむかし　ミツ 左禾

春の末まろ風やたなごゝろなる柳　九野

燕帰る烏くるりや朝の菜　南方 芦角

まゝるや二色二星小夜千鳥　ムツ 与人

山の雪とけぬ花を柳かな　夢南

麦葉はかしらそめて餅の粉　紫明

菜のむしも見て今は咲けり　白坂 起得

六

朝皃も木槿も同し西か京　近江 烏頂

田一枚まはりて折るや梅乃花　千影

色／＼も顔に出けりかうや参る　アキ 路宅

よきやうれなりや鶏の啼ッ　月章

寒けにも梅乃咲そゝるやはしり咲　和切

夜うつくしハ蛍放ちてなつかしき　二方 海雨

若竹の見事にかゝるはしかな　玉宇

雷も見事に晴もなくて小ゝ庵　雨鳥

人恋し牡丹見さしておる小大夫　伊賀 士得

天仙や日のみさし入て蜘乃糸　ムツ 素々

朧月とけ／＼と夜のゆるしけり　日人

よのむしろきの小乃葉や杜若　馬年

咲る罌粟おもはしに出来し夜々　百乳

神楽月比ゑの朝霧もかきわけ　郡山 子容

足さへすさそ若葉をといきけ夏の月　大坂 月居

雲の峰高になりし夜乃山　鷲雪

啼鶴朝そくもる夢行くかな　魯隠

すゝ菜にわかりて荻子の初音　長斎

雨後やはつ緑なりし野の小松　ハリマ 王屑

涼しさや月のこぼるゝ松の枝　奥サキ 舎律

かけ橋の雲とおくもや夜の月　節之

夏山や谷の峯ては霧ぬ　文車

いつまくら夜さへ月も昔の人　近江 申斎

涼しさや更しさし唐こし緑　亜渓

青くし桔いもの乃こうし柏手　女 志宇

さかり来たる旅待のある柳こち本　周防 古梁

里地さへつゆの外と時の出月　阿波 隱谷

浅瀬の門乃雪もぬ花のころ　ヲハリ 宜彦

雨ぬれ月や夕露の宵見霧　蓀光

ふしぎに此と舟よる田植こされ　阿瀬

鮒の有る雨乃もたやさしれ入　名川

さ行のもしよふもとくて寺の跡　ムツ 雄渕

花乃香や静ふるても晒し良　心阿

市よ住の職下しゝ手屋名れ　士由

夏の山のくらく見えし竈る　きよ女

峯の花をともへさき乱き久れ　平角

国立国会図書館　タイトル『無東西』　請求記号 863-122
ガラス使用

氷古き本に噂まてに夜刈し　（ムサシ）護物

神まつり過ぎけりすゝや時雨る　糸木

遠からりもせぬやきりぎりす　久蔵

見えすく色る汗も乞わと二書字　道彦

出あへ乃比しら師三申ある芭蕉の飛　（備尾道）一算

いすゝ冬の毛濁りけりのむし　禾三

餘物や聲かりたけのとし男　（土サ）亀玉

笠や常いよ補もなきいとゝ鳴　（下野）初道

蓮翹に於けて小さし腰の縁　北岱

越えし出ぬまや柚釜の内く雪ます　（大サカ）万和

荻ほ雲に浅あけまる荻芒哉　（サカイ）喜斎

昨日ぬひ二日ぬれけり春の雨　（アキ）蘆洲

父母の味すに洞きす桃の酒　李洞

酒の息ふきかけて見る木の芽哉　碧尾

手仏に奏をしるや竹柱　木居

芋の尻ふし新をとかなきも峯　嵐岸

旅よの身まのふおとつれ輪も如く　（イケタ）呉老

竹にしも稲を若ちる九月の雁　（下ツケ）雨塘

かこなつしまつおけハ朧なり　素檗（ミノ）
兎角々袖より芦の蟷螂　雲帯
人なるけの木まつらハし夜の月　何丸
出る先ハ日ハ菊ハうり梅もどき　武日
蕣やすはしらみもそよのかし　若人
雲扇やの裏も見えて比る松　武陵（丹羽）
よしくに雲見えて飛鳥や秋の鳴　野楊
まきのやかはやいとつの田のまつり　岚外（甲斐）
萬年来て森静けさる若葉の影　漫々

声々けや市女笠着て葛城ゆく　可都里
冬鳥の実すなるむそおりろき　有斐
冰川に一夜寝そめて帰る丁　凡十（羊）
月の出ハ多く柳すかゝりけり　曽外
露の帰りや草の庵のうらし日向　巌平（宮こ）
梅のむ白きはみのそしめにの形　浮哉（クバ）
童のもと洗ふすまれ梅の雨　虎道（備尾道）
嬉しやふさへすなきは目のたまき　麦二
大かの跡すむすゝそて来たり雨　東紺

於蔦老園興行

萩すゝきや葉咲よりもよき時節　蔦老

童下弦乃影あかる嶺の笠　釜 梅

蕪の葉も蒔きぬ別れ捨て　木 海

銅山乃すゑ枯ゆく川　老

葱の白いぬけぬ大工かぶる　梅

先手ふる初ゆみの降る　海

洞上のはえあゝ遙かに蔦遠し　老

二六時中おかせ絶茶ありけむ　梅

ひねくれた松枝をセし曲り角　海

猫図ぬの乃かゝる夕もなき　老

うき人の行衛見せて旅ふ急　梅

鐘をつきぬそくやしかる　海

七そみや手形書きぬそみ乃もじ　老

足のたてすゑて鬼界嶽の更　梅

米買ふて扇ひと手なる二ヶ月　海

春の町の札をさゝぬ軒先　老

雛さつきむの衣のうへあり　梅

国立国会図書館　タイトル『無東西』　請求記号 863-122
ガラス使用

ゑのしふけまでを見ずる　梅雪
あら玉の舞楽を旅ひ天王寺
うちかけし大ふり帰す傘
牛市に損をとらさく呼たてゝ
ものゝ十日も済て出て来ぬ
拙子の拭る汁もあやなきに
老女のえりこ詠いひつゝり
心樒の香に頭痛する夜もすがら
紀の雨を縁も果をりけ

海老梅海老梅海老梅

茶門をとんだ部屋あけておき
ちゞ殺も既にいきる肩めの六
名ありしむくく尾もむ折あく
かうろうちぬる大様ふ我
行知えて何山ゐるゝ山うしず
ゆかへけしきそれのふぬ車船
春もまうし書めし勝に嫁ゐく
ねぐくりとするむのおとろひ
何本手まだ先の伸る小商

海老梅海老梅海老梅

溝せきの色くり垣を残けり　海

芝鳳

すゝきつ小雨ふり近き波千鳥　峯梅

蕎麦苅出す手なくの夕　鳳

月夜よし心すみ叶ふ羽織出て　梅

角力の噂時々つりけり　鳳

門先のせまきしめやくも花や　梅

桝田の雨に湿へならぬ　鳳

帰入肴の酒も呑す蛭来な小松原　梅

気もてくしすまみくく　鳳

笑見すゝ娌手引し火の尾　梅

秋の色然の波々来かゝる　鳳

泡盛のおしるてすり猩々飲　梅

菊の答を告る小坊主

涼みも作田も近き月の比

旅やめも八馬乃ふらかる

いろなる乞し新ふるき銭のよめもこそ

蝶なつきや黒む楢の木　　鳳

神の竹のさらつくもゆかなかて　　梅

うしろは生ける道さみなり　　鳳

雪臣

居ませ八船の碇かな振つきり　　岱梅

春ふり晴し傘もらあやて

雛子のくる枯原の小橋わけ出て　　五春

煙まかでても朝きりんする　　乙風絮

子稲晩稲月の宴りの夜を寝す　　蘭渓

時雨のきくや乾しあり坐ら　　知澤

城志ける秀の小菜ゆおろし　　千有

山本へのうしすもくや帰　　初道

うらぶしの春は八里なる橋广御　　芝蘭

蔵延月や春のむ鉄聚観　　雪卿

作けよの氏子歌をよん時分節　　梅

なつ風よしま畑の孫の月　　臣

琵琶はなべ旅もと切ま帰るまて　　絮

簞笥ひとつに居間のてらつく　　春澤

茶袋み茶ゝこぼれても錦狗をまつ　　溪

道くこうたるけふのりそはし　　墨猪

なれまし市もたし笠の飛地町　　麦二

あきは事に様枝の友

於芭蕉堂興行

六月もうれしくかりや香のきぬ　　崟梅

秋くも遠き浅の精みせる　　蒼虬

膝なへの案り盤に酒のあうて　　隠谷

かきうこしたける垣の誰もなし　　布雪

有明を鞠の役のならぬやり　　虬

隠れは抑ころり蛇狩のなあす　　梅

房のくるく御て中奇の中　　雪

園のましときつと晴鶴　　谷

かるいたる小幟多りの焼香　　虬

吹草がちに出かめする名月　　谷

山茶をもち半報角そ打かけて

秋の夜も鞁のわけもなき音　雪

拜屋坂深しき秋に妙なり　乱

いさかひに蛤をよん月を見る　梅

年とりし兜壹のうちふのたるき　雪

さつそくの黄に御茶道の水　谷

錢縄乃袖も手も花は男ぬし　梅

大和良の土産こそ番下りしも之　乱

鞁なくしけや梅見の席の支度　峯梅

かねてよ扇取まきあ山かけ　芝蘭

帰るさ来る乙車のかよひ座て　梅

雨のきよのふの露しろをしふ　蘭

手のうへし兜勝手の方の月　梅

鳥鶴ふうゑと支り萩の花　蘭

夜はしのよきさ初下よし　、

梅之見えもし袖の丈回ん　梅

出水ふいとの宮もあ袖しなへみて　蘭

暮ゆけ鐘乃声のきこゆる　梅
葎の花咲よりあれうらゝ　蘭
別て二階へ下るへゆふ　梅
砂踏る坐の清く入る夜舟　、
暈斗も出しよ甲斐の根の月　蘭
秀衡ともとめし鷲蒲団　梅
伴僧酔て先にたつらく　蘭
折からの花のむしろ新のむ　梅
比をめくみ雀の声　蘭

吾古る帰やおかしく松の花　尼風紫
貧のしへ下きゆる良夜かな　千有
いそう庄の昭て朝先に　荷蕉
掃除仕舞い時計うつ也　圭充
此程いまの筆もなき自のさび　有
村松の引枝をつくしまず　紫
やお庭をとりても尼止て追逸し　充

かいふくに絶し啼て鳴る　樵
夜もすから老の手業の萬字巌　絮
雪にもなふて地ひしのふく　有
荒海を隔つるんの乃くるしさハ　樵
恵のよき歌くらうへ日あり　充
月や雲きえつるもおりしろき　有
二百十日乃色しらぬ茎　絮
新茎麦や先万丈の見えられく　充
やゝしくに名の気色しけ梅　樵

和歌に居井ぬ梅移おきさ迷し　絮
波みるしやくなまとめ沼山　有
三千里の旅枕よ豆我旅の笈ひ移る門田
の屑らい小急きすりのおきえ又た宍
立しめて小既よ出羽の国ゑ屏々
羽つきするそのこゑ馬に餞て旅中
の五標をこ示す甚なるに　去鮭
文首に源色ハ深しき我の水
もや月しろみて示くさ　峑梅

汁かけし木の葉やかへし餅すりて　木居
粧房とさゝえくれし古行　碧尾
帷子ひたたるぬる湯を漬て置　李洞
人ふもたまらへかゝる夕まぐれ　蘆洲
海を如何様の名を詠もせず　渚嵐
乞もらぬよふしき淡山の詠　蛙
山吹の葉のなき事をよしなり　梅
子とおもふの身をさへて帰し　居
馬てとりかけ蘇鉄の名目を呼かなし　尾

ふくさ萩身をとゆ半にやそめる　洞
蔦月ゐくとめくらひのはしめみて　洲
荷積むかふもせ茶をぬらしぬれ　嵐
取出して見なる紅葉のすり衣　蛙
たてゝいりゆちもなしとなか　梅
菊苗の匂ひもすまりなるかしく　居
はやうくなれし庭のむく子　尾

国立国会図書館　タイトル『無東西』　請求記号 863-122
ガラス使用

朝露にもえのはつけなれ花の葉　江戸 木海

とりはたやりおき喰ふ鳥て花の松　武中 千崖

竹の中ものまへかくても梅の花　オカミ 雉啄

世をとぶ鶯ふた声すり花の中　大サカ 空阿

小夜ふけ月と消まつてやつ塘の中　ヲハリ 東陽

ともしくも浅香をまけや帰る方　ミノ 如髪

家は是白き雪中より千鳥かな　出羽 素来

梅ひとは藤てとりしき藪の花　京 守三

秋さしや涼しき縁の腰まくら　ムサシ 雁令

里に鴨の門に別てはつ光へく　下ツケ 可布

道ばたや人の前馬に更衣　越中 有行

高松柿も蛙しきるきひのうち　アハ 鴎里

藁をけむもる中のかぶて花の薬降　京 桂眉

五んまざみ桂嵯峨のわたまわり　弁ゴ 國村

うらはえあくし出雲の山乃鹿　ナゴ 月守

酒の坊を降りもへかしく扇乃鹿　イナバ 松味

ありいゝ手のつり若乃をれるなり　ヲハリ 不轉

茂持つくしや掛に菜の羽織　ナスキ 茂椎

あれ〳〵と雁のきりしくこの那

早乙女よ今宵田の神逢ふ達

雛たちぬ日もいひ住居かれ浪の音

蓮の余花ありしも咲けり楽

今生の夜寒をかふる佛の形

古郷の秋風きゝけ見へて

かるかやの虫も宗鑑をいそく

ひと里とは旅にありてのむなし

宿替むかしの後にも吹もらず柳

シナノ 一茶

大サカ 星譜

下フサ 素月

江戸 濱藻

ムツ 且々

近江 六書

越ゴ 幽嘯

チクゴ 慶五

出羽 埜梅

北国の花人は終の凡ゆかなきあり
常には笑ふ年たのしき頃なしき
たのしあるも楽ふとするの三れり
をきて行頻にてつらふあみをと
小雪又ちらへとのふかせわるちのれちの
東北は生きて年のまふにおもふ
年あしく行くるも花のちの
なみ北雪を花をのかれんとかり待てあ
行

抑も東西を聞くにはせし年
数ず雲の上に鶴をまもり西東の
隅々に至り来るき人の漏るるに
秋の年の春の年道の勝に都合し
なる風土に聞傳へしをを
けし乙集めて一冊となして
桜木年のをしにさせしは
鳥志なる二百文の序に贈り

此らのたぐひを我にみせりし年
まさしくは心ことさら書添めん

文政三年
庚辰春

岩之梅

863
122

14195

国立国会図書館　タイトル『無東西』　請求記号 863-122

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『無東西』 請求記号 863-122

ガラス使用